

令和元年6月14日現在

機関番号：32689
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2018
課題番号：17K13415
研究課題名(和文) サミュエル・ベケットの後期演劇における二重性

研究課題名(英文) Duality in Samuel Beckett's Late Theatres

研究代表者

山崎 健太 (YAMAZAKI, Kenta)

早稲田大学・坪内博士記念演劇博物館・助手

研究者番号：90779076

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は劇作家サミュエル・ベケットの後期演劇作品における語りと舞台上の視覚イメージとの関係に注目するものであり、テキスト分析の理論的枠組みとして「物語論」の手法を導入することで、ベケットの後期演劇作品を包括的に論じる枠組みを確立することが目指される。また、演劇への「物語論」的手法の援用可能性および、現実と虚構の二重性を演劇の特質と捉える「演劇性」研究との相互参照可能性を探ることも本研究の目的となる。2年間の研究で「物語論」に関する先行研究の整理、および、ベケットや彼の影響下にある作家の戯曲における「語り」の構造の基本的な整理・検討を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ベケットは国内外を問わず以後の演劇に大きな影響を与えた劇作家であり、その演劇作品を包括的に論じる枠組みを用意することはベケットのみならず演劇研究全体に寄与する。また、物語論の枠組みで演劇作品を論じること、演劇を文学研究のなかに改めて位置づけつつ、上演芸術としてのその特異性をも明らかにすることである。「語り」は2019年現在の演劇実践において改めて注目されつつある要素であり、本研究は演劇研究と実践を架橋する意義もある。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the relationship between the image on the stage and the narrative in Samuel Beckett's late theatres. To analyse all his late theatres, I apply the theory of narratology to theatre studies. In this research, I also try to relate the theory of narratology to the theory of theatricality. I have finished checking previous studies about narratology and the structure of narration in theatre pieces of Beckett and his follower playwright.

研究分野：演劇

キーワード：ベケット 物語論 演劇性

1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで、アイルランド出身のフランスの劇作家サミュエル・ベケットの演劇作品について、特に後期演劇作品における語りと舞台上の視覚イメージとの関係に注目して研究を進めてきた。

ベケットの後期演劇作品においては、舞台上に視覚イメージとして提示される状況と酷似した状況を、舞台上の人物が(多くの場合は三人称の下に)物語として語るという入れ子めいた構造が頻出する。後期演劇作品においてベケットはほとんど一貫してこのモチーフを追い続けたと言ってもよい。この点はすでに先行研究においても度々指摘されており、たとえば Bernard Beckerman は‘Beckett and Act of Listening’(1986)の中で一連の後期演劇作品における語りを聞くという行為に焦点をあてた分析を展開している。ところが、後期演劇作品における語り的问题に注目した研究の多くは、ジャック・デリダ『声と現象』(1967)を筆頭に現象学的な観点、あるいはそうでなくても精神分析を含めた西洋哲学的な枠組みからの作品分析を試みるものであり、作品内部における語り手と聞き手との関係についての考察に留まるものであった。つまり、これらの先行研究のほとんどにおいては「上演」や「観客の作品受容」という観点からの考察が十分に行なわれていないのである。後期演劇作品の多くが「舞台上の視覚イメージ」と「それに酷似した状況についての語り」から構成されている以上、両者の関係を観客がどのように受け取るかこそが重要であることは明らかである。

「上演」という観点はベケットの演劇作品全体を考えるうえで看過できない、極めて重要なものである。ベケットはメディアの特質に極めて敏感な作家であった。演劇においては『ゴドーを待ちながら』ですでに、登場人物が自身が演劇の登場人物であること(あるいは俳優として舞台上に立っていること)に自覚的であるかのような言葉を発する場面が用意されており、以降の作品においてもこのような「楽屋オチ」はしばしば繰り返されることになる。このことはベケットが早い段階から演劇というメディアの持つ二重性(俳優と役、現実とフィクション)について自覚的であったことの証左であると言える。後期演劇作品における視覚イメージと語りについても、舞台上の現実とそこで語られるフィクションという点で二重の構造を作り出すものであり、そこには『ゴドーを待ちながら』から通底する問題意識を見出すことができるだろう。ゆえに、上演において舞台上の視覚イメージと語りとがどのように関連し合うのかという観点に基づいた分析は、後期演劇作品のみならず、ベケットの一連の演劇作品を見通す一つの視座を獲得するために必須のものなのである。

また、本研究において理論的枠組みとして導入する「物語論」の先行研究において、演劇はその特殊性ゆえに例外的な扱いを受けている場合がほとんどであり、極端に一般化された形でしか登場してこなかった。換言すれば、個別具体的な作品にその理論を適用できるほど、演劇における物語論は整備されていない。

2. 研究の目的

本研究は戯曲のテキスト分析に重きを置きつつ、それが上演をどのように規定しているのかをあきらかにすることを目指すものである。同時に、「語り」をその劇構造の中心に置くベケットの後期演劇作品のテキスト分析の理論的枠組みとして「物語論」の手法を導入することで、ベケットの後期演劇作品を包括的に論じる枠組みを確立するとともに、その構造の複雑さゆえに例外として「物語論」の議論の中心から外されてきた演劇への「物語論」的手法の援用可能性および、「物語論」と同じく現実と虚構の関係性を対象とする「演劇性」研究との相互参照可能性を探ることも本研究の目的となる。

3. 研究の方法

演劇というメディアの持つ二重性という観点から戯曲とその上演を検討する。戯曲と上演という2つのレベルを扱うため、物語とその語りを扱う物語論の枠組みを参照する。

物語論の先行研究をそのままベケットの後期演劇作品に援用することはできないため、以下の3つの段階を踏む。

- a) 物語論の先行研究を整理し、個別具体的な演劇作品への物語論の理論の適用可能性を探る。
- b) ベケットと関連作家の作品を中心に演劇における語りのパターンを整理し、演劇作品の物語論的分析のための基礎を準備する。
- c) ベケットの後期演劇作品の分析を行なう。主にテキスト(戯曲)分析に拠り、個々の作品(戯曲)において視覚イメージと語りとの関係がどのように規定されているのかを分析していく。ベケットの後期演劇作品においては多くの場合、提示される視覚イメージは作品の最初から最後までほとんど変化がないが、上演の時間経過の中で語りと視覚イメージとの関係は変化していくことになる。視覚イメージと語りとの関係が上演の時間経過の中でどのように観客に対して提示されていくのかを戯曲に基づいて丁寧に追っていくことは、分析における一つの重要なポイントとなる。

4. 研究成果

「3. 研究の方法」の各項目に基づき、個別具体的な作品分析の前提となる基本情報の整理を行なった。

- a) 物語論の先行研究において演劇がどのように論じられてきたかの整理・検討
- b) ベケット、ハロルド・ピンター、別役実など、不条理劇に分類される作家の作品を中心とした語りの構造の整理・検討
- c) ベケット『あしおと』『オハイオ即興劇』の分析

以上を実施し、『あしおと』『オハイオ即興劇』を物語論を援用して分析する論文執筆のための準備が整った。当初の研究計画では2年目に両作品の分析と論文の執筆を終えている予定だったが叶わなかったため、次年度以降の課題とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。